

関東大震災時の日記・書簡にみる軍人・政治家の思想 震災前の記述と比較して

From diaries and letters of the Great Kanto Earthquake to see
the thoughts of soldiers and politicians:
By comparing the normal times before the earthquake

学籍番号：201321629

氏名：神永 亜季

Aki KAMINAGA

岡部（1983）は災害時において、普段複雑で分かりにくい社会的情報伝達のプロセスが顕在化するとしている。以上を敷衍すると、非常時を平時と異なる姿が見られる機会と捉えられる。

本研究は個人の非常時と平時を比較し差はあるのか、あるとすれば何かを探る。広範囲に影響を及ぼしている地震災害直後を非常時の事例とし、その中でも地震当時の状況や人物たちの評価がある程度定まっている関東大震災を扱う。対象は公表を前提にしておらず、出版物よりも自由に文章が書ける日記や書簡とした。対象者を、文筆が職業ではなく本人の従来歴史的評価を把握しやすい点から、軍人と政治家とする。

先行研究では、槌田（1992）や川本（2011）など関東大震災時の日記同士を比較する論考が多い。また、後藤（1996）は日記と当時流行した天譴論の思想との関係を扱った。しかし日記を非常時と平時に分け、複数人の思想を扱ったものは管見の限り見当たらない。

以上より、本研究の目的は軍人や政治家の日記・書簡における記述内容を対象者ごとに比較し、非常時と平時との思想に差異があるか否かを明らかにすることである。

研究方法は軍人・政治家の日記や書簡を対象とする文献調査である。対象者は陸軍軍人2人、海軍軍人2人、文官政治家6人の計10人とする。対象期間は、震災前平時が1923年4月1日から同年8月31日、非常時は震災発生後の1923年9月1日から同年12月31日までとする。対象文献の政治や軍事、思想に関わる記述すべてを段落単位で選別し、非常時と平時との間に思想の変化があるか否かによって比較した。思想比較の観点は、記述内容がリベラルであるか否か、合理的であるか否かとする。リベラルと合理的、アンチリベラルと非合理的はおおむね対応しているが、例外もあるため、定性的比較の中で詳しく見ていく。また平時については、『詳説日本史』（山川出版社）や『世界大百科事典 第二版』（平凡社）から期間中の対象者についてリベラルか否かの通説的理解を析出し、日記・書簡の記述と比較する。

合理性とリベラルな記述の多寡で定量的比較を行った結果、平時はリベラルな記述よりもアンチリベラルな記述が多い執筆者が3人、アンチリベラルな記述よりもリベラルな記述が多い執筆者が7人となった。しかし非常時には、リベラルな7人のうち、3人の日記や書簡でリベラルな記述よりもアンチリベラルな記述の方が多くなった。3人の共通点は、職業軍人や宮内大臣、思想事件の調査経験がある元警察官といった本来アンチリベラルな職業イメージを抱かれる職歴を持ちながらも、平時の日記や通説的理解がリベラルであるという点である。また、平時にアンチリベラルな記述をしている執筆者は、非常時と平時の記述に差異は見られないことが明らかとなった。

つまり、平時にリベラルである人間は非常時に思想が変わる可能性がある一方、平時にアンチリベラルな人間は非常時にも変わらないことから、非常時にはアンチリベラルな思想が増加する可能性が示唆された。

研究指導教員：後藤 嘉宏
副研究指導教員：白井 哲哉